鏡の国の有栖

福田 伶詩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鏡の国の有栖

【Ｎコード】
Ｎ６９１０Ｃ

【作者名】
福田　伶詩

【あらすじ】
鏡のなかを覗いてごらん？何が見える？――鏡に映る［自分］は、本当に［自分］ですか？

朝のアリス（前書き）

ホラーじゃないですょ

朝のアリス

彼は女顔だ。

しかも、とびきり可愛い部類の。

毎朝、彼は鏡を見て思う。

「もう少し、顔が男らしかったらな。。。」

ガタイは決して悪くはないのだ。

寧ろ筋肉質な方。

しかし筋肉を付けると痩せてしまうタイプなのか、華奢な女の子に見えてしまう。

階下から、彼の母親の声がした。

「エナカ-　！！起きて起きてッ」

仕方なく、彼——有栖　依央は母の言葉に返事をし、一階へ降りていった。

「何？母さん」

「エレンが、小6のときのエナカの背に追い付いたの！！ちょっと見て！！」

めんどくせ、と呟いて依央は可愛い妹、依蓮の元へズルズルと歩いていった。

「兄ちゃんおはよ」

「。。。はよ。レン」

依央が依蓮にした挨拶は、なんだか久しぶりな気がした。

依蓮は兄と真逆で、男の子みたいな事を悩んでいる。

「見てよ！！ほらほら」

柱に付けたしるしは、確かにぴったりと依蓮の頭のてっぺんにあっていた。

「すげぇじゃん
このまま伸びて天井についたりして」

「やめてよ
もう少し縮まないかな」

まったく羨ましい限り、と依央は思った。
依蓮の身長が１５７ｃｍなのに対し、依央の身長は１６５ｃｍ。１０ｃｍも違わない。

「抜かされたらどうしよ-。。。」

ボソッと呟いてしまった。
本音だ。
「抜かされたら抜かされたでいいじゃな-い。あ、エナカはもう学校行かなきゃマズイんじゃない？早く行きなさい。」

自分で呼び出しといて。。。
そう思ったものの、あえて口に出さず、テーブルの上にあったウインナと玉子焼きを一つずつ、口に入れて外へ飛び出した。

幼馴染とアリス

依央が遅刻ギリギリで家を出ようとすると

「エ - ナカちゃんッ♪」

鈴の鳴るような声がした。

その声の方を振り向くと、１つ年上の幼なじみ、古月　百道が立っていた。

「ももちさ - ん。。。

俺忙し「ねッ、バイクの免許取ったッて言ったたっけ？乗せてってあげるよ。どうせ学校でしょ？」

依央の言葉を遮って、百道は報告と救いの言葉を述べた。

「ありがたく乗らせて頂きます。」

彼は見事食い付いた。
彼がヘルメットを被り後に跨るとすぐに、百道は出発した。

「つかまってて。」

「ん。分かった。」

しばらくの世間話のあと、こんな会話をし始めた。

「ね。モモは何で彼氏作んねぇの?
お前なら放っといたって男は寄って来んだろ?」

一瞬の沈黙の後、笑いながらこう答えた。

「まだまだエナカが心配だからだよ。
遅刻ぎりぎりで家出たりするしさ。」

「なんだよそれ。
俺のせいかよ。」

ちょっとすねた声を出してしまった。

「エナカだけのせいじゃないよ。
あたしはただゲームについて熱く語れる、カッコいい男がいいだけなのに。
皆顔だけでさッ。ゲームとか興味ナイッて感じ。」

。。そうだ、こいつゲーマーだったっけ。。。

エナカは心に10の打撃を受けた。

「。。。モモ、本当お前もったいないないな。」

「エナカに言われてもな～。

あーかっこ良くて背高くてバスケしてるスラ◯ンの流◯楓みたいなゲーマー転がってないかなー。」

理想高えよ。

学校の中のアリス

それからしばらくして、学校に着いた。

「サンキュ、モモ。」

「どういたしまして。」

教室に入ると、俺のツレ達が駆け寄ってきた。

「はｙ「はよー、なんかテンション低い顔してんなー！！エナカ！」
「いや絶対お前がうるさいだけだって。」
「つか二人ともうるさいって。」
「いいじゃん騒がしくいこうよ！！」

ちなみに今の会話に俺は入っていない。
あ、厳密に言うと入ってないわけじゃなく、初めの「はｙ」の部分が俺。それだけ。

そんな騒がしいツレたちの中でも一番うるさくて俺の話す言葉を遮ったのは、『芳樹（ヨシキ）』。

そのあとに上手いツッコミを入れたのが、『寛之（ヒロユキ）』。通称ヒロ。
そんな2人に対して冷静に鋭い指摘をしたのは、『宏（ヒロム）』。ヒロだと被るから、呼ぶときは苗字の内田から発展して「ウッチー」。
そして、最終的にまとめたのは、『ユタ』。頼れるお兄ちゃんタイプで、皆の信頼を得ている。

それに＋俺の５人グループで、いつもは行動している。
ウッチーが、そういえば、と話しかけてきた。
「今日の１時間目自習になったってさー。
良かったね、エナカ。」
「マジで！？良かったぁ～。」
「そうだ、次の当てるのはエナカから、って前田言ってたもんな。」
前田か…やなエピソード付きの数学教師。でもって俺たちの担任。
「でも、何で自習？」
「風邪かなんか？」
「さあ～。『エナカちゃん』の事が気になって眠れなかったんじゃないの？」
芳樹がおちゃらけると、皆が俺の方を向いた。やなエピソードがらみの、やな呼び名。
まあ前田のせいだったけど、あれから謝ってはくれたから、別に怒ってるわけじゃないんだけどさ。
「あの日は本当に面白かったな。『男の子なん！？ウソや～』とか言っちゃってさ。」
宏に全てを言われるのも癪だから、自分で説明する。
２年生に上がった日のこと。新任だった前田は、俺の事を女だと思

ってたらしい。

「えっと、そこの出席番号2番の…有栖エナカちゃん、彼氏の制服借りんのもええけど、今日は始業式やから、きちんとしてくれや。」

いきなり名前を呼ばれてびっくりして、裏返ってしまった声で、こう言った。

「え、俺ですか？」

「俺って、女の子なんだから言葉遣い気ぃ付けな。ほんで、誰の制服？」

この後、ほんの少しだけシーン、と静まってから、一気にクラス中に笑いが起こった。

俺は恥ずかしさで笑うどころじゃなかったが。前田だけは、自分の言った事がおかしかったのかと思ってか、

「俺間違った事言ってないよなあ？エナカちゃんに注意しただけだし。」

『エナカちゃん』、と前田がもう1度言ってから、また笑いが倍増した。

そこで、去年もクラスが一緒だったユタが、笑いながら前田に説明した。

「せんせ、この子、男の子。ちゃーんと付いてるから。」

「え、男の子？冗談やろ〜。えっと…川島ユタ君？先生からかうのはやめましょうや。」

「いや、だから男の子ですって。声変わりしてますよ。」

その一言を聞くと、前田は唖然とした。

「ウソやッッ！！ちょ、なんか喋ってみて。」

今度は冷静になる事ができた。ゆっくりと息を吸い、言葉を放つ。

「いや、俺女の子じゃないっすけど…。」

この声を聞いて、前田は動揺したようだ。一気に喋りかたがぎこちなくなった。

「いやぁ、男の子かあ。すまんな。エナカ君。ユタ君も。」

そして、なんともなかったかのように、「じゃあ、出席番号順に並んで。」と言って紛らわそうとしたものの、俺は出席番号2番。2列になる出席番号順は、偶奇で別けられ、なおかつ一番前は担任。気まずさはＭＡＸだった。

「そんな事もあったな〜。懐かしいな。」

「俺は全然鮮明に覚えてるよ、あのあとの一言を。いまだに鳥肌が立つ。」

「『女の子やったら惚れるとこだった』、だっけ？」

「うっわ、思い出させんなよ！！バカ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6910c/

鏡の国の有栖

2010年10月8日21時59分発行